

# 米沢の教育

Vol.5

米沢市教育研究所



## 特集 『米沢の適応指導』

- 座談会
- 適応指導教室紹介
- スクールカウンセラーから



# 米沢の教育

## も く じ

巻頭言 .....	1
特集 「米沢の適応指導」	
○はじめに .....	2
○座談会 .....	3～7
○適応指導教室から .....	8～9
○主な相談機関 .....	10
○スクールカウンセラーから .....	11
特別寄稿	
○小島光江氏『三步下がって師の影を…』 .....	12～13
報告 平成15年度 教育研究発表会 .....	14～15
米沢市教育研究所の紹介 .....	16～17
新博物館における教員ボランティア活動 .....	18
平成15年度米沢市小中学校教育研究一覧 .....	19
編集後記 .....	20





## 「生きる力」

米沢市教育研究所長

丸 山 信 也

平成11年11月、オーストラリア・シングルトン  
を訪問する機会をいただいた。シングルトンは、  
オーストラリア東部のニューサウスウェールズ州  
(シドニーより北へ350km)にあり、大草原に囲ま  
れ、ゆったりとした空気に包まれた美しい町だ。

10日間の訪問中、特に3泊4日のホームステイは  
今でも鮮やかに思い出される。広大な豪州の大地  
に生きる人々にとっての「生きる力」とは何かを  
肌で感じる毎日であった。「自立できる技を身に付  
けること、自分の命は自分で守ること、そして家  
族や隣人をこよなく愛す」という強い信念に満ち  
た人々との出会いがあった。

ホームステイ先である、「ヴィッカス家」はギリ  
シャ生まれの移民であり、教師である両親と、姉  
(大学生)と中学生のアンドレイ君の家族である。  
周囲数kmにも及ぶ広大な土地に平屋建ての家。山  
羊や羊鶏などの動物を飼い、農地では手作りの野  
菜や果物を育て、五反歩ほどの葡萄畑からは自家  
製のワインが生まれる。息子アンドレイが成人し  
た時の贈り物として、50本の苗木も育てられてい  
た。早朝、アンドレイが野兎を捕まえてきた。早  
速親子での解体作業が始まった。父が兎を抑え、  
息子がナイフを器用に操りあっという間に皮を剥  
ぎ、完了した。父がナイフの使い方を指導しなが  
ら慣れた手つきで操る二人の姿は、自然の営みと  
して、生きる知恵や技を伝え学ぶ厳しくも温かな  
姿として目に写った。

「ルノー家」も教師の家族であるが、広大な牧場  
で肉牛を飼育しており、高校生の息子が大型の機  
械(トラクター)で耕作している最中であった。  
途中で、機械の調子が悪くなり、親子で3時間以  
上にも渡る修理が始まった。隣の家や町とは数キ  
ロメートルから数十キロメートルも離れており、  
修理屋を頼むことはほとんどないという。故障し

た機械は勿論、家屋や器具等は殆ど自ら修理・修  
繕するという。中学校や高校での学習で、技術家  
庭が重視される所以も頷けた。そして、ここでも  
子どもに技を伝える父の姿があった。両家の子  
どもにとっては、生きていく上での必死の体験であ  
る。彼ら自身、意識せずに身をもって学ぶ「生き  
る力」である。骨太の「生きる力」を垣間見た思  
いであった。

我が国でも教育改革の柱として「生きる力」の  
育成が叫ばれた時であった。体験学習の大事さが  
強調された。しかし、体験学習による「生きる力」  
の指導には、よほどの覚悟が必要であり、つまみ  
食いの発想ではどうにもならないことを痛感し  
た思いであった。体験学習者には、その体験する切  
実感がなければ単なる体験となり、辛さや苦しさ  
が無ければ一過性のものと考えられるからである。

確かに、「生きる力」を支えるものとして技術や  
技能を大事にするのは、この国が多くの移民によ  
って開かれた国であり、生きることは開拓すること  
であり自分を作ることであつたらう。家族の絆を大事  
にすることも、質素な生活も歴史的背景があろう。

日本人の歴史もやはり、真剣に生きてきた歴史  
である。そして現在もまた真剣に生きているはず  
であるが、生活の便利さとともに大事なものを失  
ったように思う。親の権威を失い、子ども達に大  
人になることの喜びや希望を失わせてしまったの  
ではないか。この10日間は、そのような思いを強  
く意識する旅となった。

11月、いよいよ米沢も冬支度が始まった。米や  
野菜、果物の収穫、そして雪囲い。伝えるべき技  
や思いがいたる所に詰まっているはずなのに、な  
ぜかそこには子ども達の姿が見えない。

私たちが子ども達に伝えていくべき技とは何か。

私たちが子ども達に伝えていくべき心とは何か。

米沢市の学校教育の課題の一つとして「不登校問題の解消」があげられています。

米沢市の不登校児童生徒数（年間30日以上欠席）は、平成13年度末で小学校34名、中学校104名。平成14年度は小学校32名、中学校115名となっています。

米沢市教育研究所ではこの課題を解決すべく、平成14年10月に「スクールガイダンスプロジェクト」実施計画を立ち上げました。「スクールガイダンスプロジェクト」とは、当該学校が中心となって進めている学校復帰のための取組みをサポートするため、適応指導教室がその中心的な役割を担って進めていくものです。この実施計画は今後3年間を目処として進める学校支援強化策となっています。

今回は、このようなスクールガイダンスプロジェクトで活動しておられる方々の座談会や適応指導教室の活動紹介などを特集します。

多様な個性を持つ子どもたちに対し、学校として担任としてどう対応していけばいいのか、難しいことも多くありますが、毎日の教育活動の示唆となるものがあればと思います。

## スクールガイダンスプロジェクト

### 1 基本方針

- (1)適応指導教室を「ガイダンス教室」と「フリースペースよねざわ」の2室にして受け入れの幅を広げ、学校復帰に向けた支援体制を強化する。
- (2)適応指導教室に新たに適応指導員と補助員を配置し、週5日の担任制をしく。
- (3)学校や家庭をサポートするため、市内を4ブロックに分け、これまで「ガイダンス教室」での指導を主にしてきた不登校対策専門員と教育相談員の4名が訪問指導を行う。

### 2 解消に向けたステップアップ3カ年計画

#### (1)ステップ1（平成14年度）

学校復帰支援とひきこもりの解消  
適応指導教室通室者の学校復帰をめざす。  
ひきこもり児童生徒の適応指導教室への通室をめざす。  
別室登校児童生徒の通常学級復帰をめざす。

#### (2)ステップ2（平成15年度）

学校復帰支援とひきこもり解消  
自立支援のための体験活動の充実  
学校支援（幼・保、小、中）

これまでの体験的適応指導をさらに充実させ、また宿泊訓練を定期的実施し、自立性や社会性を身に付け、学校復帰やひきこもり解消のための支援プログラムを強化する。

ガイダンス教室やフリースペースよねざわを拠点として、家庭と学校とをつなぐ役割をはたす相談機能を充実させる。

米沢市教育研究所として、「豊かなかかわりを持てる子の育ちを考える委員会」を開催し、乳幼児期からの子育てに関し、不登校未然防止につながる教育のあり方を考え、それに基づいた幼・保を含んだ学校支援及び家庭支援策を検討する。

#### (3)ステップ3（平成16年度）

学校復帰支援とひきこもり解消  
教室復帰のための教科学習の充実  
家庭支援、地域連携

ステップ1・2をさらに機能させるため、必要により適応指導員を増強する。それにより教室復帰のための教科学習の充実を図る。

家庭支援のため、夜間や休日の家庭訪問等を増やす。

「豊かなかかわりを持てる子の育ちを考える委員会」の提唱に基づく、特に就学前教育に力点を置いた事業を行う。

# The 談会

## 【出席者】

スクールカウンセラー 加藤 玲子 先生  
 ガイダンス教室 関戸 勇雄 先生  
 フリースペース米沢 相田 光照 先生  
 米沢五中養護教諭 相羽 仁子 先生

秋の一日、四名の先生方に集っていただき、適応指導について、いろいろ語っていただきました。

## 今、子どもたちは…

関戸：最近、学校の生活が変わってきていると感じています。子どもたちにとっては今の学校生活の中でしなければならないことがとても多いですね。その中でやや力のない子やついていけない子は、何となく学校での居心地がよくないとか、他の子からおいて行かれるという感じを持って、頭が痛いとか休みたいとか疲れたという気持ちが出てくるようです。昔は校内暴力などの形で出てきました。今の子は学校生活も落ち着いている反面、逃避して自分の世界に閉じこもる子が増えていると思います。力のある子とそこまで達していない子の差が出てきているのではないのでしょうか。

相田：フリースペースに来ている子たちは学校のことをつまらないとよく言います。友情関係や人間関係の希薄さを指しているようです。昔は学校で友達と遊んだりけんかしたりすることで自分を表現していましたが、今は自分で心を開くことが表現できない表現しづらになっているのではないのでしょうか。本当に言いたいことが言えない、自分の気持ちが伝えられないとなると、それを発散するすべも知らず、自分の中でためてしまっているという気がします。フリースペースの子たちは、そこでけんかしたり笑ったりする関わ

りの中で少しずつ自己表現をし、やがてそれが自分の自信につながって、学校へと目が向いてきているようになっていっているのかなと考えています。

加藤：私は今、比較的落ち着いている学校に勤務させていただいています。まじめで良い子たちばかりですが、逆に元気がないと思う所もありますね。サポートを求めてくる子の話を聞いていると、疲れてきていて自分に対して自信を失っているという状態かなと思います。

思春期の中学生の時期には、いろんな問題があって、重い症状をサインとして出す子もいれば、そうなる前に話を聞いてもらいに来て、ひとしきり自分のことを言語化して、整理をつけて学校生活にもどっていくという子もいます。今は本人ががんばりさえすれば何でも望める時代。価値基準がたくさんあって、自分がどうなったらいいのかもたくさん選べる状態にあるから、むしろ一生懸命にガンバっても到達できない時に元気がなくなっちゃうのかなと。それに応じて身体がいろんなサインを出すのではないかと思いますね。

相羽：中学校は、思春期という発達節目と進路問題が重なり、保健室への来室理由も本当に様々です。確かに悩みがあるから成長すると言いますが、私は、悩みながら子供達が自分のペースで成長していこうとする過程の支援、そのために安心できる場所の提供、環境の調整をしていきたいと思います。たとえば、目標が高すぎたり、できな



い自分を認められなかったり、がんばりすぎる自分に疲れて保健室に来る子がいます。中学校になると、改めて自分を見つめるようになり、親が期待するほどの勉強の頑張りができない、それを親にも担任にも言えないと悶々と悩むわけです。しかし、何回か来室を繰り返して、話をしていく中で、徐々に自分の気持ちが整理され、担任に受験の悩みを相談したところ、担任が真剣に自分のことで悩んでくれることに心が動いたということがありました。結局ははっきりした解決法はみつきりませんが（それは、自分なりにこれから考えていくとして）先生方が関わってくれる姿や、そういう関わりを通して人間関係の大事さを感じ取ってくれたようです。今の子は、ぶつかること、自分の気持ちを出すことを避けようとしています。ケンカをしたがらななかったり、言葉のやり取りも直接でなくメールで交換し、時間と距離を置いてやっています。

### サインは力!!

加藤：学校へ行きたくないとか、こもりがちになるというのはサインです。思春期に自分の課題を乗り越えていくことは、子どもにとってとても大変なことですね。その時に周りの人達に心配してもらったりして、周囲のサポートをうまく引き出して自分の方に働きかけてもらうためにサインを出しているんです。それは弱さだという言い方もありますが、サインは一つの力だと思います。「今、自分はめいっぱい大変だから、周囲の大人の人達は僕のことをサポートしてください、考えてください。」という発信は、もっと精神的な成長をするためのサポートを求めている力です。サインを出せる子は、その時点で回りの大人から一生懸命いろいろ考えてもらえるし、いろんな力をもらえるから、その後その子が成長していく上での土台になっていきます。だから一つの力だと思うんです。そしてこれは発達過程＝成長する途中に出すものなので、そういうサインを出したからそ

の子が弱いとか強いとかというのは、大人になってからじゃないとわからないだろうし、完成された人間なんて求めたとしてもいないだろうから、そんなふうな見方をしていくと少し楽になるのかなと思います。

相羽：そういうサインを出す子に周囲の大人がうまく関わるようにしていきたいですね。

### ステップアップを支援して

関戸：子どもが成長し、小学校や中高校に入り、社会に出て行くわけだが、中には関わり方が不十分だったり、身につけるべき事が身に付かないまま成長のステップを踏んでいく子もいることを前提にして教育をしないといけないと思う。小学校から教育内容は高度化し目標は高くなっていて、それに子どもたちすべてを近づけようとするとな大変な子もいます。弱い子もいるんだということを常に念頭に置いて教育にあたらなければいけない。優秀な子や能力のある子だけを見ながらでは見落としてしまうことがあるのではないのでしょうか。すべての子どもが人の前でうまく話ができるということはない。書くことはきちんとできるが、発表することは苦手だという子もいる。ちょっとしたいじめやいやなことがきっかけとなって、人の前に出ることがいやになった経験を持つ子どもたくさんいます。子どもたちのそういう道のりを振り返って見てやれる大人だと、そういう子も救われるのかなと思っています。サポートのしかたによっては、だんだんとステップアップしていける子どもたちも多く出てくると思うし、そういうことが大人としては大事なのかなとも。すべての子どもが同じレベルなのではないということをつかんでおくことが大切なのです。

## 5点、10点から

加藤：休む子は、例えば物事を考える時に0点か100点で考えます。例えば登校するという事は、遅刻せず朝からちゃんと教室に行って、すべての学校のメニューをこなすことが登校で、それができない時は学校へ行かない。0点。途中からは行けない。登校したらきつくても早退を申し出ることができない。初めから100点満点をとれないならやらない。不得意なことには参加しないで、避けようとする。満点ではなく5点や10点、30点、今自分ができることを考えることができない。

休んでしまう子はやれる力が全くなくなっていくのではなく、あるんです。そういう時にある程度自由に活用できる時間と空間があれば、自分がココまではできるということが確認できるんです。またそこから教室へというのはいろいろサポートが必要なのですが、そういう場があるということが大事なのです。そしてその場を学校の組織の中でどういかしていくかが大切です。学校の時の流れと全く別の形ではなく、先生方にも関心を持ってもらって交流を持って行くということができれば、来さえすれば良いんだという状態をまず作れば、やがてだんだんのびのびしてきて元気がよくなってきます。

一番必要なのは、子どもが今の自分にちょっと近い未来の目標を立てて、自分はどうしたいか、今何ができるか、できることをこつこつやりためていくという自己決定をしてやってみて、それでやれたねという自信を持っていくことの繰り返しだと思うんですよ。まず登校できたということから今度は教室に行くことまでの、その間を埋める小目標を一人一人考えていく必要があるんです。

相田：子どもは、小学校児童とか年組の生徒などと集団で考えるのではなく、くん

さんというように一人一人なんです。この子はこの子、それぞれウィークポイントがあって、そこでちっちゃなこんな成長でいいからそれを大

きくほめる。子どもが小さな階段でも上っていった、気づいた時に自信につながっているんだなということが加藤先生の話で改めて思いました。子どもってどうしても大きな目標を持ちちゃうんですね。

加藤：やれそうもないことをね。棒高跳びのように。こなさないといけないと思って。

相田：でもちっちゃいところからいけば、そんな高い所も越せるのかなあと。目標を持つということは良いことだから、その目標をいっぺんで越さなくとも、ゆっくりゆっくり越してもそれはいいんだよという、遊びの部分というルーズな部分が彼らの自信につながるし、ふと気づけば目標に到達していたりするんだなと思うんです。



## 即効性と遅効性

加藤：元気のいい子だったら、注意されるようなことをやって、でもまた声をかけてもらう、気にかけてもらう、見守ってもらうということを実感することがあります。先生が注意していたのに、見た目の服装も直らないし、指導しても入らないということもあるかもしれませんが、そういう関わりによってその子が愛情とか暖かさをもって、その後のきっと人間関係に反映されていくんです。教育指導はその時の関わりの効果を即求めること（即効性）...そういう指導も必要ですが、ある意味ではカウンセリング的な効果というのは遅

効性、効果が遅く出ていくということもありますね。こういう両面で子どもの成長を見守っていただらいいかもしれないと思います。

関戸：適応指導教室でも、来た当時は全く勉強しない子もいる。それが30分勉強するようになったらたいしたもんだ。ほとんど引きこもりだった子が、適応指導教室に顔を見せるという段階もたいした進歩だ。登校しなかった子が一週間に一回登校するようになった。その子の回りの子も自分も一週間に二回学校に行くというステップをふみ始める。そういう時はその子なりにすごい進歩だと認めてやらないといけない。毎日見ていると一人一人の進歩が間近に見られる。子どもたちの成長はすばらしいものがあるんです。だんだんそういうステップをふむことで子どもたちは成長していくのですよ。

心の教室相談員を担当していた時、適応指導教室に来る子がどんな条件だと教室に戻りそうかと相談して、席は廊下側の一番後ろ、みんなが先生の方を向いている授業、班活動などではない授業だといいということで、国語や社会からだんだん一緒に授業に参加して、3年生の2学期から普通に教室に入ったという子もいる。ステップを踏むと教室に戻ることができるんだ。その子なりにある程度ステップを踏むことが大事だと思う。朝、適応指導教室から学校に行き、適応指導教室に戻ってくるという子も、そういうステップのある段階にいるんです。



## 連携をはかりながら

加藤：ステップアップしてくると、だんだん先生方には見せない面、甘える面もだしてきて・・・のびのびしてはいるのだが、のびのびしたエネルギーを望ましい方向に流してあげるにはどうしたらいいかなということ、養護教諭の先生とかスクールカウンセラーや担当者だけで考えるのではなく、学年とか学校全体で考えることが大事です。

関戸：大事なのは、立場立場でどう連携して仕事をしていくのかということだな。スクールカウンセラーと心の教育相談員といろいろな立場の人が配置されたので、配置された学校ではそれぞれの立場での連携がうまくしていかないと成果が上がらない。私たちも今年度から家庭訪問や学校訪問ができるようなシステムが実現した。4名が分担して学校訪問と家庭訪問をしている。スクールカウンセラーとだぶっているような面もあるが、それぞれの専門性や立場を十分に活かしながら、連携をうまくとっていくようにすることが大事なことです。

連携をとりながら、一人の子を複数で見ることです。そういうことを一人一人の教員も日頃から気をつけて取り組んでいけばいいのかな。マナー化しないようにしながら。年度当初の方針は保護者にもPRしながらやっていくことでしょ。

加藤：校内連携も校外連携もあると思うが、役割分担だと思っています。先生方やそれぞれの立場の方の仕事の関係をよく考えて、それがうまくいくように考えています。それからいろんな先生方や子どもの話をたくさん聞くようにもしています。まず聞いて、今の状況のやり方でいいということを確認するだけで違うし、一緒にまた考えたり。先生方に元気になってもらって働いてもらうことが、私の一番の仕事かなと思っています。

## 毎日の中でこんな事も大切に

加藤：私の学校では、二日続けて休んだら学年などで話題にします。情報を共有して学校とのつながりが切れないように、連絡を取りあうことを欠かさないようにしています。

相羽：職員室黒板の欠席状況が職員みんなで見るができること、話題にできることは大切ですね。二日欠席というのは大事なポイント。実際には、二日というのは厳しいけれど、「どうしたのかな。」と捉えることは大切だと思います。それから、健康観察で、出席しているけれど訴えが多い子や頭痛、腹痛が続いている子、学年会でよく名前が出る子など気になる子供達の情報を集め、廊下で会った時はなるべく声をかけるようにします。「用がなければ保健室に来るな」という指導がありますが、保健室に来る子は何かがあるから来るのだと思うので、臨機応変に対応していきたいと思っています。

## 幼児期からの子育ての中で

関戸：予防となると、学校だけではなく、幼少期からの子どもとの関わりが大切。スクールガイダンスプロジェクトも二年目。豊かな関わりを持つ子育てを考える委員会も発足させて、幼稚園や保育園の先生も集めて委員会をして、どうすればいい関わりができるかを幼少時から考えようとしている。

加藤：子育て支援は幼児を抱える保護者からですね。

関戸：子育てに悩む親やそういう研修は大切だ。幼少時に育てるべき事、つけるべき力がおろそかにならないように。そういう研修をしあうべきです。小学校から中学校にはいる時の落差も。小中

連携、幼少中連携などもはかりながら、ステップを細かくし、フィードバックしながらそういう子どもたちを迎えるべきでしょう。

加藤：この前、適応教室で子どもたちのけんかがありました。始めは争いも避けようと思いますが、生活するうちにだんだん元気になってきて、それぞれの子ども同士間に信頼関係もできてくると、ぶつかりあいもでてくるんです。次の日はごめんなと謝っているのですが、そういうことがおけると毎日毎日がドラマのようですよ。それに関わる先生方は大変だと思いますけどね。

関戸：能力の高い子にもプレッシャーがある。いろんな目でその子を見てやり伸ばしてやる必要があるんだと思います。

加藤：今の子はあきらめない。

関戸：周りが「あきらめるな、頑張れ」と言うと、子どもたちは必死になって頑張ろうとする。しかし、周りの大人が期待するようにはいかない子もいるんです。

相田：適応指導教室の子たちは、学校はきらいだと言いますが、学校の先生が適応指導教室にきてくれるととてもうれしがるんです。自分を忘れないで足を運んでくれることで、子どもは気にかけてもらっていることを感じて、とてもうれしがっている。きらいなだけで嫌われたくない。結局好きだということなんですね。

今日の先生方のいろいろな話の中にとっても大切なキーワードがたくさんありました。そういうもの子どもたちのエネルギーに変えていきたいと思っています。

ありがとうございました。

(編集担当 菅野 賢二)

# 適応指導教室

## ガイダンス教室・フリースペースよねざわ

### 1. 経営目標

- (1) 心理的要因などによって学校不適応を起こしている児童生徒に対し、家庭以外の安心しているような活動ができる場所を提供する
- (2) 適応指導教室での集団生活を通して自立心・社会性を高め学校適応を図る

### 2. 目指す児童生徒像

関わりのできる子ども

適応指導教室の仲間や職員、在籍校の人たちと自分から関わったり、思いやりを持ったりすることができる

自分の気持ちを表現できる子ども

自分の気持ちを素直に話したり、行動にうつしたりできる

考えて行動できる子ども

生活のリズムを整えたり、マナーやルールを守ったりすることができる

### 3. 経営方針

- (1) 「ガイダンス教室」と「フリースペースよねざわ」の互いの良さを生かしながら連携して運営する
- (2) 児童生徒の個々の実態に応じて、教育相談、集団生活への適応指導、学習指導等に柔軟に対応する
- (3) 自然体験活動や社会体験活動を数多く取り入れ、その充実を図り目標達成に努める
- (4) 児童生徒個々の支援のあり方について、担当者が話し合いを持ち共通理解を図ってあたる
- (5) 保護者に対しては、保護者会やカウンセリング、

親子での交流等で連携を図る

- (6) 在籍校の校長、教頭、生徒指導主事、担任、養護教諭、心の教室相談員等関係職員との連携を密にし、円滑な学校復帰を図る

### 4. 本年度の重点

- (1) 一人一人に応じた学校復帰への手だての充実
- (2) 保護者・在籍校との連携強化
- (3) 体験活動への新たな取り組み

### 5. ガイダンス教室の特徴

- (1) 通室人数（平成15年10月末日現在）

小学生3人 中学生8人 計11人

- (2) 指導体制

- ・ 月曜日～金曜日まで適応指導員2名  
適応指導補助員2名が教室指導を行う
- ・ 火曜日、水曜日、金曜日は、不登校対策専門員と教育相談員各1名が訪問指導と教室指導を行う

- (3) 日課表

8:30	始業 自由時間
9:00	学習 小 50分 中 60分
10:00	自由時間
11:30	昼食準備（みそ汁作り）
12:00	昼食・後片づけ
13:00	学習（中学3年）
14:00	自由時間
14:40	清掃
15:00	自由時間
16:00	出席カード記入 帰宅

## 6. フリースペースよねざわの特徴

## (1)通室人数(平成15年10月末日現在)

小学生3人 中学生11人 計14人

## (2)指導体制

- ・月曜日～金曜日まで適応指導員1名  
適応指導補助員1名が教室指導を行う
- ・水曜日、木曜日は、不登校対策専門員1名が訪問指導と教室指導を行う
- ・必要に応じて、ボランティア1名が適応支援を行う

## (3)日課表

8:30	始業 自由時間
9:30	朝の清掃
10:00	『私の時間』(学習・読書等)
11:00	自由時間
11:45	昼食準備(みそ汁作り)
12:15	昼食・後片づけ
13:30	学習(中学3年は個別指導)
14:30	自由時間
15:00	清掃
15:15	出席カード記入
15:20	自由時間

## 7. 適応指導教室での活動内容

## (1)適応指導

- ・人間関係づくり  
来室している仲間と集団生活を通して、良い友人関係の樹立

調理学習・会食 おしゃべりスポーツ  
トランプ・将棋・オセロ

- ・基本的生活習慣の改善

生活リズムの確立、最低限の約束・決まりを守れる指導

- ・体力づくり

ひきこもりや昼夜逆転傾向の子のための体力作り

毎週月曜日アクティ米沢の体育館での  
軽スポーツ活動

- ・体験的活動

豊かな体験を通し、自然や他の人たちとの交流を図る

キャンプ・宿泊学習 勤労生産学習サイクリング  
オリエンテーリング

- ・学習指導

基礎的な勉強や遅れている勉強の回復を中心とした学習

各学年に応じた個別指導  
進路相談・高校受験勉強

## (2)連携指導

- ・学校訪問と家庭訪問

市内を東西南北4ブロックに分け担当者が実施する

- ・学期毎の『親の会』

お互いの悩みや考えを出し合う家庭と適応指導教室での連携強化

- ・不登校児童生徒の実態調査

毎月、来室児童生徒の様子を在籍校へ報告等をし、密に情報交換をする

- ・学校以外の関係機関、関係者との連携

民生委員 児童相談員 病院民間の支援団体

## (3)教育相談活動

- ・不登校で悩んでいる家族の来室や電話相談に対応

- ・家庭、学校、適応指導教室との"つなぎ役"になり、必要に応じて家庭訪問を実施する

## 主な教育相談機関

- 1 米沢市適応指導教室
  - (1)ガイダンス教室 電話(21)7830  
米沢市門東町一丁目5番36号
  - (2)フリースペース 電話(21)6510  
米沢市通町六丁目5番7号
- 2 県教育センター  
天童市大字山元字犬倉津2515番地
  - (1)すすくダイヤル  
電話 023(654)8181
  - (2)さわやかダイヤル/FAX  
電話 023(654)8383
- 3 山形県福祉相談センター(中央児童相談所)  
山形市十日町一丁目6番6号  
電話 023(622)2543

## 豊かなかわりを持てる子の育ちを考える委員会

- 1 はじめに  
平成14年10月より実施しているスクールガイダンスプロジェクトに基づき、昨年度末に本委員会設置に関する条例が制定されました。このことを受け、今年6月に本委員会が発足しました。本委員会の所掌事務は、次の3つです。
  - ・人とかわる力を育てるための子育て、教育支援に関すること。
  - ・社会全体で不登校児童生徒を支援する体制づくりに関すること。
  - ・子育てに関する情報の提供や学習の機会に関すること。
 また、本委員会のメンバーは、小・中学校の教員の代表者、小・中学校のPTAの代表者、幼稚園・保育園の代表者、乳幼児をもつ保護者の代表者、社会教育関係団体の代表者、学識経験を有する者、本市の職員である者の16名で構成しています。なお、本委員会の事務局は、教育委員会学校教育課が担当しています。

### 2 委員会(第1回目)の要旨

第1回目の委員会は、6月24日(火)午後3時から、16名の委員全員が出席して置賜総合文化センターで行われました。はじめに、16名の委員に委嘱状が交付され、続いて、教育長が「生涯学習の視点に立ち、乳幼児期から大人が豊かにかかわっていけば、不登校が根絶できるのではないだろうか。」とあいさつをしました。次に、各委員および事務局員が自己紹介し、委員長に一中校長佐藤嘉一氏が選出されました。

協議では、はじめに、事務局より、本委員会設置までの経過やスクールガイダンスプロジェクトの進捗状況の説明がありました。続いて、各委員より、それぞれの立場から、今現在の子どもたちの実態が出されました。その中で、特に「小1プロブレム」が話題となり、全小学校にアンケート調査を実施し、実態把握をすることになりました。

### 3 委員会(第2回目)の要旨

第2回目の委員会は、9月24日(水)午後3時から、15名の委員が出席して置賜総合文化センターで行われました。早速、協議に入り、全小学校を対象にした「小1プロブレム」に関するアンケート調査の集約結果をもとに、各委員より様々な意見が出されました。次に、アンケート結果の背景や、さらには、今の子どもたちや親の実態をふまえながら、「何ができるのか。」という視点で話し合いがなされました。その中で、子どもたちをより良く成長させていくためには、子どもにもまた親にも「豊かなかわり」が重要であるということが改めて指摘されました。

なお、「小1プロブレム」に関するアンケート調査の結果からは、「我慢強さがなくなっている。人とのかわりを好まない。」などといった子どもたちの様子や、「子どもにかかわりすぎるか、かわらないかの両極端である。」という親の様子が浮かびあがってきました。大変忙しい中でのアンケート調査へのご協力ありがとうございました。

(編集担当 山口 義宏)

## スクールカウンセラーから

米沢市立第二中学校  
スクールカウンセラー 加藤 玲子

ストレスは、マイナスのイメージでよく語られますが、別の見方をすると、人間をより豊かで強靱なものに成長させてくれるきっかけになるものとも考えられます。適度のストレスは、その人が今の状況の中で努力したり工夫したりすることで乗り越えられるもので、克服できた時自信を回復し、今までの自分にプラスアルファの部分が付け加えられるものです。このことは、日常の中でいつも繰り返されているといっても過言ではありません。

ストレスが過剰にその人にのしかかる時、不適応の状態が引き出されます。子どもに起こる様々なサインを大人側がどう受け止め、どう援助するか、そして子ども自身の回復と成長と自信にどう結び付けていくかが大切です。

学校生活の中、子どもたちは心の危機状態をいろいろなサインで示してきます。身体症状、人間関係のトラブル、行動面では逸脱行動だったり様々です。子ども時代から大人へ移行する過渡期である思春期。一人ひとりたいへんな課題を抱え、現代の様々なストレスとからみあって、悲鳴ともいえるようなサインを出してくるものだと思います。そのサインのひとつとして不登校という状態像があります。不登校の背景には様々なことが考えられますが、ここでは不登校の状態から、段階を追ってみます。

### 《不登校の経過理解のヒント》

#### (1)ブレの状態（予備軍）:

遅刻や欠席、保健室に行く回数が増える。元気がなく、体調不良、悩み、困ったこと等の訴えが多い。

#### (2)心身症傾向の時期:

頭痛、腹痛等起きるが、午後は回復。休日は症状が出ないことが多い。身体化の傾向。

#### (3)いらだち・反抗の時期:

イライラ、不安、不眠、反抗、暴力など、周

囲の態度との関係も絡み、様々な反応を示す。

#### (4)閉じこもりの時期:

自室のみ、家の中等、程度は様々だが、外出はほとんどしない。

#### (5)家庭内適応の時期:

登校しないこと以外は家庭で通常の生活が保てる。

#### (6)学校・社会復帰の時期:

適応指導教室や塾などに通い始める、教室へ直接戻る等復帰の仕方はいろいろ。環境の変化、高校進学後に通学できることもある。

6段階にまとめましたが、各段階の間にも様々な状態があり、その対応には多様なステップが必要と思います。

(3)~(6)の状態では地域の適応指導教室と学校と家庭との連携が大切です。各々が独立して支援していくのではなく、情報交換を行いながら、信頼関係を育て協力し合っていくことが重要と考えます。

(1)(2)の状態では、深刻な状態になる前に校内でできる援助を考えること、「初期対応」が必要です。一番大切なことは、家庭やその生徒と学校の関係が途切れないように心掛けるということです。子どもの状況をよく見極め、「今できること」をやりためていく作業をサポートして、回復を促していくという方法です。その時校内に「心の教室」のような場があるということはとても有効と考えます。

### 《不登校の初期対応》

- ・校内、学年等のスタッフで子どものことについて話し合う（休みが2日続いたら）
- ・家庭の役割と学校の役割の明確化  
家庭...休息、学校...つながりが途切れないように
- ・親の対応への援助
- ・身体症状への対応  
内科的症状について検査、症状に対しての医療的ケア、除外診断
- ・話をよく聞いてあげる



特別寄稿

## 三步下がって師の影を……

小島光江氏  
(フリーアナウンサー)

仰げば尊し我が師の恩～ 私はこの歌が大好きである。この歌を耳にする時、口ずさむ時、言いようのない想いに駆られる。そして教えを受けた先生方の微笑んでいる顔が次々と思い浮かんでくる。まるで「元気にしてる？立派な大人になった？いいお母さんしてる？頑張れよ！」と私に語りかけて下さっているような微笑みである。しかし、この歌が卒業式で歌われなくなっただ位の位たつのだろうか。実は、私自身の卒業式では一度も歌ったことがないのである。この歌と共に、行方が気になるのが、「三步下がって師の影を踏まず。」もはや死語になってしまったのだろうか？

学校は、一昔前とはがらりと様変わりした。先生方の社会的地位も、地域との交わりも、父兄との関わり方も、生徒たちに対しても、実に変わったように思う。まして、教育勅語の時代とは比較にならない。学習指導要領に至っては、現場を理解できない上級行政マンによって変えられ、現場を次々と混乱させているのではないかという疑念さえ抱く。もちろん、変化は重要であ

る。ダーウィンは「唯一生き残るものは変化できるものである。」と言うが、現代日本の教育における変化は、本当に生き残っていけるものなのだろうか...？日本の将来、世界の未来を担う子どもたちの教育環境に、私は実に危機感を持っている。

最近の青少年犯罪の悪質化や低年齢化は、教育環境の変化により、日本人が失ってしまったものの中に大きくかかわっているように思う。家庭では躰が行なわれず、地域社会では子どもを育てず、学校では限られた時間の限られたルールだけが最優先される。それではと、小学校に“ゆとり”の教育がなされても、年齢が上がるにつれて補習授業に化け、暗記教育、点数主義に拍車がかかる。たった一日のセンター試験が人生すべてのように親までもが洗脳される。決められた価値観、ルールは絶対なものであろうか？誰かが自分の都合のよいようにルールを決めはしなかつただろうか？

I B Mが主催する“東北会議”が毎年各県で開かれる。主催県の県知事、市長、教授、社長等、文字通り政教財界から40名程

が集り、丸二日間激論を戦わす。この会ほど本音で話し合える会は他にない。そして15名～、時には半数が入れ替えになる。私は毎年ドキドキワクワクしながら翌年の招待状を待つのである。公務員と呼ばれる人々は、身分が保障されている。安泰であると同時にかえって本音で行動しにくいのではないだろうか。偉人と呼ばれる人々の幼少の頃のエピソードに、“ルール違反”に粋な計らいをした先生方が多く登場する。そしてその事が、偉人への道の入り口だったりもする。

それにしても、先生方の社会も、ある意味、お気の毒である。“鍋蓋社会”と呼ばれ、新人でも何十年のベテラン先生と同じ権限や責任を負わされる。私が常々考えていることがある。今の日本の制度では無理だが、教育者として社会人として十分なトレーニング期間を差上げたい。“なぜ人間は学ぶのか？”の原点に立ち、教育とは何か？教えるとは何か？をとことん考える時間である。それを実行するには、発展途上にある地域のような、学ぶことや学校そのものを必要としている所で、体験を通して考えるのがベストだと思っている。自分自身が異文化を体験し、価値観の違う中での教育とは何かを考え身につけた先生方に、未来を担う子どもたちを委ねられたらと切望している。学校も整備されていない国の子どもたちが、「将来、先生になりたい。お医者様になりたい。」と目を輝かせて話す姿に、日本でもせめて10年先、15年先の自分を考えられる教育を是非と願っている。

上杉鷹山の演劇の脚本家、ジェームス三

木さんが「米沢に鷹山公あり、日本人の心あり」と言っている。現代日本が失いつつある美しい日本人の心が、この米沢には残っていると。決められた価値観から脱出することができる心と自然環境、そして先人たちの営みが残る米沢から、学校改革、教育改革の火種が倫理観というガソリンで大きく日本中へ燃え広がることを希望する。

先日、信号待ちの時の高校生たちの会話である。「同窓会しても担任だけは呼ばねべな。」「当然、アイツだけは絶対ヤンダ！オレ達だけで集まっぺな。」鷹山公には聞こえただろうか？「三步下がって師の影踏まず」はもはや化石となってしまったようだ。

### 小島光江さん プロフィール

I.C.U (国際基督教大学卒)。

仙台放送アナウンサーをスタートに、日本女性初のニュースキャスター、元同時通訳者として活躍。

NCVの“おじゃましますNCVです”の企画・制作を10年間担当。現在は、フリーアナウンサーとして幅広く活躍されている。

チョコレートとアイスクリームをこよなく愛しながら、幅広い教養と交友を持つ米沢きっての文化人の一人。

## ＝ 報 告 ＝

# 平成15年度 米沢市教育研究発表会の概要

### 1. はじめに

今年度の米沢市教育研究発表会は、置賜総合文化センターとグラウンドホクヨウ米沢を会場に、教育長による講話の後、ポスターセッションによる研究協議が行われた。



ここでは、今回発表された23の部会の中から、特に参加者の多かった3つの部会について、世話係のご協力を頂き、各ポスターセッションの様子を報告させていただきます。

### 2. ポスターセッションの様子

#### “分かるけど嫌い”にどう応えるか ～算数科の興味・関心・意欲について～

興讓小 太田 和広 教諭

#### (1) 発表の概略

「算数は分かるけど嫌い」、「家庭学習が少ない」、「テレビ・ゲームの時間が多い」、「お手伝いが少ない」、「職業のためには勉強していない」、「親のためには勉強していない」などの調査から浮かび上がった日本の子どもたちの姿。また、質が高いと注目をあびている日本の算数・数学の授業。相反するこの2つの現実から、私たちが算数科の授業を展開するにあたり、どのようなことを大切にしていけばいいのか、多くの調査結果や資料を用いた発表であった。

小学生に対して行われたアンケートからは、「分かるけど嫌い」という子どもたちが、学年が上がるに従って増加していくこと、「分かるから好き」という子どもが減っていくことなど、一見意外とも思える結果があった。

発表では、「分かるけど嫌い」という結果に着

目し、その理由や対策についてさらにアンケートをとり、その結果をもとにした5年生の「敷き詰め模様を描こう」の授業実践も報告された。

#### (2) 質疑応答の様子

様々なアンケートの結果について、参加者に答えを問いかける形をとりながら、参加者も日本の子どもたちと、世界の子どもたちの算数・数学に対する意識の違いについて興味深く考えることができた。

参加者からは、「分からないから嫌い」という子にどう指導していくかだけでなく、「分かるけど嫌い」という子どもたちのために授業を改善していくことが大切だという話が数多く出された。T・Tによる指導や習熟度別授業の導入、「数学的に考える」ことを授業の中にもうま取り入れていくことの必要性も提起された。個に応じた授業や支援のあり方の大切さを改めて考えさせられる発表であった。



(米沢市立興讓小学校 教諭 藤田 美樹)

#### 学級経営

#### 『Q-Uを用いた学級集団の把握と対応』

西部小 金子 聡子 教諭

#### (1) 発表の概略

学級集団の状態を把握するための「調査法」の一つとして『たのしい学校生活を送るためのアンケートQ-U』を用いた実践結果の報告であった。

Q-Uには、やる気のあるクラスを作るためのアンケート、いごこちのよいクラスにするためのアンケート、自由記述アンケートの3種類があり、児童個々及び学級の状態を理解するための客観的な診断尺度として、全国で活用されてい

る。金子教諭は、このうち、のアンケートを昨年の5月、7月、11月の3回行い、データを診断し、その都度、対応策を考えて学級経営を行ってこられた。実践の結果、

- ・個々の得点が座標で表されるため、学級集団の状態や個人の得点の推移などが読み取られ、具体的な対応策が考えやすい

・対応策を実践し、次のQ-Uの結果に表れてくるといことで大変効果的であったことが報告された。



### (2) 質疑応答の様子

初めに、Q-Uについての内容や実施方法、データの読み取り方の説明がなされた。その後、一つのアンケートの集計表から、実際に座標にプロットし、そのクラスの状態を読み取るという演習が行われた。参会者全員、真剣に取り組み、診断を行った。大事なことは、診断した後の対応である。また、一人で悩まない、抱え込まないことも付け加えられて発表が終わった。

ほぼ時間いっぱい発表であったが、各学校のアンケート調査の実践や、調査後の対応、保護者との連携などについて話が出された。この研修をきっかけに今後Q-Uを取り入れて実践してみたいという声が多く聞かれた。

(米沢市立東部小学校 教諭 長谷川奈保美)

## 道徳 “心を耕す教育実践”

4中 発智 由紀 教諭 他

### (1) 発表の概略

まず、「心を耕す教育実践」として、各学年のボランティア活動、及び、道徳を軸とした取り組みの発表があった。

1年生からは、道徳の授業実践についての発表と、合唱による上級生や地域との交流についての発表があり、老人福祉施設での歌声発表会の様子

など、映像を交えての発表であった。

2年生からは、道徳の授業実践と校内外でのボランティア活動の実践とが発表された。生徒の実態をふまえて、今生徒たちに何が必要かを考え、4クラスが同じ題材で授業に取り組みされていた。

3年生からは、校内美化ボランティアの活動についての発表があった。生徒会総会で決定した目標をもとに、生徒たちが自主的に企画・運営した活動が紹介されていた。

### (2) 質疑応答の様子

学年ごとの発表が終わると、準備してあった掲示物を見ながらの交流の時間が設けられた。会場がホールという事情もあり、一か所に集まりにくい状況だったが、多くの参加者の皆さんが集まり、活発な質疑応答や情報交換がなされていた。

最後に、会場全体での情報交換の時間を設け、他の学校での実践例などを、お聞きすることができた。中学校からは、プルタブ集めや一人暮らしの老人への手紙などの実践例が紹介された。また、小学校からは、学校外に出て、自分たちでできることを探して、ボランティア活動をした例が紹介された。さらに、参加者から、学校で行うボランティア活動は、単発で行うのではなく、回を重ねてこそ意味があるといった意見も出され、活発で有意義なポスターセッションとなっていた。



(米沢市立窪田小学校 教諭 黒田 由美)

### 3. おわりに

時期は8月5日(火)と昨年度より若干早くなったが、夏季休業中の開催は2回目、ポスターセッション形式の発表会は3回目となり、各会場とも優れた実践発表をもとに活発な意見交換が行われていたようである。今後とも、こうした機会を大事にし、自らの実践を振り返りながら、日々研修に努めていきたいものである。

(編集担当 黒田 晋)

# 米沢市教育研究所の紹介

## 基本方針

米沢市教育研究所は、その設立目的に則り、教育に関する調査研究を行い、教育計画の樹立に資するとともに、併せて教職員並びに社会教育関係職員相互の研修の便宜を供与し、教育実践の向上を図るため下記の活動を行う。

- 1 職員の研究活動を活発にするために合理的な運営を図る。
- 2 教育の本質的な研究を進め、地域教育の振興に資する。
- 3 教育相談室の内容を充実し、その活動を積極的に推し進め、利用の普及拡大を図りながら、適応指導の充実につとめる。
- 4 社会教育・学校教育の研究に資するため、情報を収集・処理整備し、広く教育情報の普及・提供につとめる。
- 5 社会教育上の問題について研究するとともに、社会教育活動に協力し、市民の教育的関心と理解を高める。

## 機 構

- 専門部 中学校教育研究会 小学校教育研究会
- 教育情報サービス部 教育と情報研究小委員会
- 教育相談室
- 調査研究部 学力実態研究小委員会 博物館と教育研究小委員会
- 社会科副読本編集委員会

## 各小委員会の活動の概要紹介

### 学力実態研究小委員会

今年度の活動は、昨年度初めて実施した「算数たしかめテスト」の問題を検討し、到達度テストとして、より確かな評価ができる問題を作成することです。

問題作成にあたっては、2月上旬に実施（1月までの学習内容）、解答はできるだけ記述式、数学的な思考に重きを置くを踏襲し、また、昨年度のアンケートの結果から、問題の内容や文章、図示、問題数を吟味して作成します。そして、2月末までに市の平均正答率を全校に連絡し、学期末の指導に役立てていただけるよう、取り組みを進めています。

佐藤美知子（三西小）	神保 弘美（関根小）	久坂部逸子（西部小）
菊地 泰志（南部小）	山口 玲子（北部小）	小林 修（興譲小）
棚村 順子（万世小）	菅野 靖子（三東小）	鈴木 淳一（塩井小）
長谷川奈保美（東部小）	上松 尚（上郷小）	手塚由起子（南原小）

## 博物館と教育研究小委員会

伝国の杜（米沢市上杉博物館・置賜文化ホール）と近隣の小・中学校において、博物館事業と学校教育活動との連携のあり方について具体的な実践研究を進めていきます。まず、児童・生徒が、歴史・自然資料や芸術・文化作品を学習の手がかりとして活用する取り組みを行うとともに、その情報を発信していきます。さらに、ミュージアムブック「博物館へ行こう」の効果的な活用の検討を進め、博物館を児童・生徒の学習センターとして活用することができるような取り組みを進めていきます。

遠藤 誠（南部小） 太田 和広（興譲小） 藤田 美樹（興譲小）  
山吉美枝子（南部小） 小池 直人（南部小） 小林英美子（第二中）  
佐藤 詠一（第二中） 遠藤 桂子（文化課） 花田 美穂（学芸員）  
千田 祥子（事業企画員）

## 教育と情報研究小委員会

学校教育及び社会教育に関する資料や情報を収集、整備し、広く教育情報の提供につとめるのが本小委員会の使命ですが、その中核が「米沢の教育」です。今年は5号と6号で、米沢市の教育課題の一つでもある「不登校児童生徒への支援」を、スクールガイダンスプロジェクトの活動から取り上げ（5号）、また「評価」については、小学校での「新しい成績表の工夫」と、中学校での「絶対評価の取組み」を（6号）、それぞれ特集として取り上げます。

菅野 賢二（第七中） 長谷川 均（関根小） 黒田 晋（松川小）  
黒田 由美（窪田小） 佐藤 哲（上郷小） 鹿俣 浩（第五中）  
高梨恵理子（第六中） 佐藤 繁（第三中）

## 社会科副読本編集委員会

全面改訂した社会科副読本『わたしたちの米沢』の発行も2年目を迎えました。今年度は、最新の資料収集に努めると共に、各学校における社会科副読本の活用状況調査を実施することにしました。実際に授業の中でどのように活用されているかを調査し、現場の先生方のご意見をお聞きしながら、次年度に向けての改訂作業を進めています。3・4年生の社会科指導にあたる先生方や学んでいる子ども達にとって、よりよい社会科副読本となるよう編集に取り組んでいます。

志摩 宏之（関小） 江村 剛（北部小） 島扇 成美（窪田小）  
須藤 正彦（愛宕小） 鹿野美紀子（東部小）

（編集担当 長谷川 均）

# 新博物館における教員ボランティア活動

## 趣 旨

「伝国の杜」が開館して早2年、新博物館ではその間に多くの企画展とワークショップが開催され、特にワークショップは教育普及及び利用推進のために毎月企画され、いずれも申し込みが定員を上回るほど好評を博しています。そのような中、平成13年度末より教育普及に寄与することを目的とし、それぞれの得意や能力を生かし、博物館活動をボランティアによって支援し、児童生徒及び市民の博物館利用および学習をサポートするものとして教員によるボランティア活動が始められました。



市民向けワークショップでの指導

## 活動内容

博物館の教育普及担当者と話し合いながら、原則的に無理のない範囲で支援し、以下の内容でボランティア自身も博物館利用を楽しむようになっています。

### 1 「企画・常設展の鑑賞の援助」

展示会の内容を子供たちにわかりやすいように「ガイドシート」や「鑑賞シート」を作成し、入場の際に利用してもらう。

### 2 「ワークショップの援助」

展示に関連したワークショップや、子供たちや市民を対象としたワークショップの指導や援助を行う。



教育普及担当者との打ち合わせ

### 3 「博物館の総合的な利用についての援助」

博物館利用の子供向けマナーブック作成のアドバイス。博物館そのものを知る学習用資料作成のアドバイス。

### 4 「教育現場に於ける利用促進の提言」

学校に於ける博物館利用の促進や、子供たちに博物館展示の案内をするなど積極的に取り組んでみる。

## 活動の様子

現在のボランティア数は、小学校3名、中学校4名、養護学校1名で原則的に休日に活動し、連絡は必要に応じ電子メールや電話で行っています。活動としてはワークショップの援助が中心となっておりそれぞれの得意の分野で活動しています。

活動に興味のある方、参加してみたい方は博物館の教育普及担当者までご連絡ください。



幼児向けワークショップの援助

(米沢市立第三中学校教諭 佐藤 繁)

## 平成15年度 米沢市立小中学校教育研究一覧

No.	学校名	研究主題およびサブテーマ
1	興讓小学校	自ら学びとる力を育てる学習指導 確かな力をつける授業づくり - 国語科・算数科・生活単元学習 -
2	東部小学校	楽しく表現し合い、響き合う心をもった子どもの育成 - 伝え合う力を育てる国語科授業の創造 -
3	西部小学校	社会科研究テーマ：「出会い 考え 自分が変わる」社会科学習 生活科研究テーマ：「出会い 気付き 自分が変わる」生活科学習
4	南部小学校	夢を持ち、豊かにたくましく生きる児童の育成 - 生きる体力の向上 -
5	北部小学校	輝くひとみ あふれる笑顔 広がる世界 - 確かな学力の向上をめざした学校づくりを通して -
6	愛宕小学校	自ら学び、生き生きと表現する子どもの育成 - 学びあい、伝え合い、高め合う授業づくりを通して -
7	万世小学校	基礎学力の定着と活用をめざす学習指導 - 豊かなかわりづくりを通して -
8	関根小学校	確かな力を育む授業の創造 - 国語科の学習指導を通して -
9	南原小学校	- 学校マグネット化構想の一環としての校内研究をめざして - ひとりひとりに学ぶ楽しさを
10	関小学校	主体的に生き生きと学ぶ子どもの育成をめざして - 一人ひとりの考えを深め広げる算数科授業の実践 -
11	三沢東部小学校	学ぶ楽しさ、わかるよろこび - 子どもの学びを支える教師の関わり -
12	三沢西部小学校	少人数を生かし、確かな力をつけるための授業の工夫 - 意欲を持ち、楽しく学び合い、学んだことを生かせる子どもをめざして -
13	広幡小学校	自ら考え、共に学ぶ子どもの育成 - 主体的な算数の学習を通して -
14	六郷小学校	輝く目・生き生きした声・のびのびした姿
15	塩井小学校	お互いの良さを認めながら、共に高め合う子どもの育成をめざして - 「元気いっぱい学校体育」への取り組みを通して -
16	窪田小学校	自ら学ぶ力を育てる - 協力指導による授業改善をめざして -
17	上郷小学校	自らもとめ、高め合う子どもたち - 伝え合い学び合う学習を通して -
18	松川小学校	自分の思いを生き生きと伝え合い、共に高め合う子どもの育成 - 話すこと・聞くことの指導の工夫を通して -
19	第一中学校	未来を拓く生徒を育てる
20	第二中学校	かかわる まなぶ 自分を変える - コンピュータ活用による新たな学習デザイン -
21	第三中学校	感性を生きる力に - 授業で育む感性を中心に -
22	第四中学校	目標を持って前向きに生きる生徒の育成
23	第五中学校	一人ひとりに確かな学力をつける教科指導
24	第六中学校	生きてはたらく確かな学力を目指した指導法の研究
25	第七中学校	豊かな自己を表現し、学ぶ楽しさを感じ合える生徒の育成 - 基礎・基本の確実な定着を目指して -
26	南原中学校	学びの自立を目指す学習指導法の研究 - 主体的な学びを育む表現の場の工夫 -

15年度発表校

16年度発表校

## 編集後記

適応指導教室だより 4の冒頭に「元気をつくる熱源光源水源体」という一文が掲載されていました。この文章は、学校すなわち私たち（ここで子どもたちに関わる者たち）のあり方について問いかけているようです。教育改革は、変化してやまない社会に育ち、先が読めない未来をたくましく創造しながら生き抜く人間を、私たちがどう育むのかという私たち自身の課題であると思います。そしてその答えは、この社会全体と目の前の子どもをしっかりと見取っていくことなしには導き出せないのではないのでしょうか。

本市では「豊かなかわりを持てる子の育ちを考える委員会」を立ち上げました。子どもたちを、家庭や幼保小中高、そして社会全体の連携の中で育もうとする動きが随所で始まっています。

「米沢の教育」vol.5編集部では、本市の教育課題である適応指導について、その最前線で活躍しておられる方々の座談会を中心にしながら、特集を組んでみました。各学校でもまさにそのようなエネルギーを供給すべく、さまざまな工夫と実践がなされていることと思います。本紙で特集したことが、何かのアドバイスになれば幸いです。

「米沢の教育」は情報の双方向性を持った教育情報誌です。ご意見、ご要望など、お気軽に教育研究所までEメール等いただければ幸いです。

（菅野 賢二）

「米沢の教育」URL : <http://www.educ.yonezawa.yamagata.jp/kenkyujo/yonekyo/index.htm>

米沢市教育研究所教育情報サービス部  
（教育と情報小委員会）

vol. 5 編集担当

長谷川 均（関根小）      黒田 晋（松川小）  
佐藤 繁（第三中）      菅野 賢二（第七中）  
山口 義宏（教育研究所）

---

米沢の教育 vol.5

2003年12月

発行所 米沢市教育研究所

〒992 - 0012

米沢市金池 3 - 1 - 55

TEL ( 0238 ) 22 - 5111

FAX ( 0238 ) 21 - 6925

---